東海道中
続膝栗毛四編

七 上

へ 13
3286
7

續膝栗毛四篇巻之首

安方の所併、立役の紀行十六夜日記東関紀行の類、世に行るゝ事のあれど、皆下ざまの時代物に擬するの事をばいふまでもなし膝栗毛の世に八切品を専として弥次郎兵衛北八弥次二夜の外方東海道の

清
門 へ 13
號 3286
巻 7
昭和十六年一月十一日寄贈
尾野貴英氏

此奥を開ひ今四五冊におよんで粒吉
の趣を久しく人物狂言幕の運び
身をよする頻なるものハ作者の手抜宿
えづれの芝不氏も領か諜の定役是
より在に出入るを競ふべし紹介ま往生
二番目に頻して一散ちらす京街道の大
諸まりいるものハ大帳にて不足の話

すでは世界ましく新冊より五篇
出ての旅行に従て伊勢参宮のまはり
仕舞大津街道の保付合八五十篇目の
赤出しに載しハ鳴呼大儒先生生
出ふ文化の二百冊目を出をでますれ
なりて膝栗毛の四篇目二年も不
首遍して割衣な脱ぬれるハ御地嘗之下始の

大名題三故舎の評判記まで一通まとし

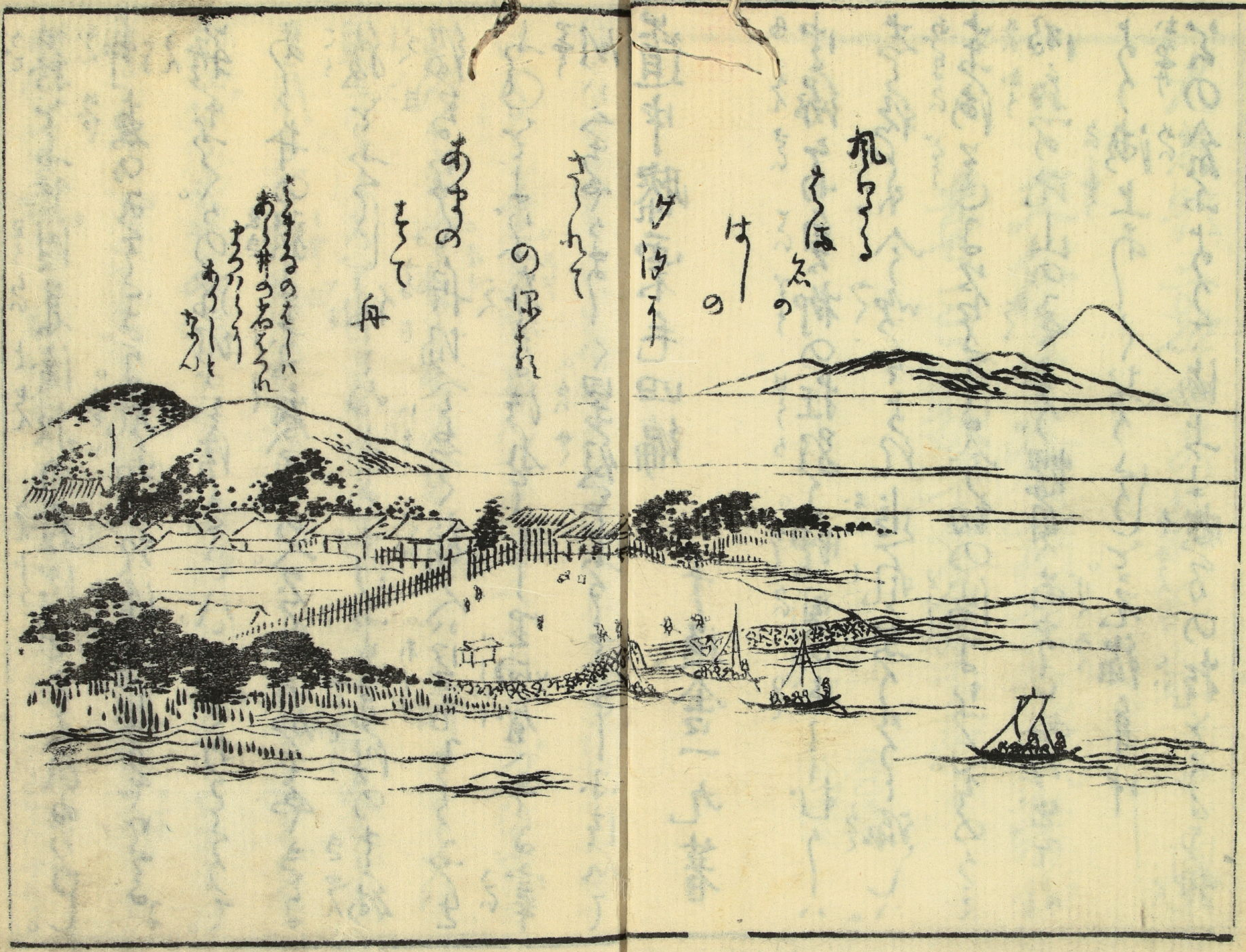
文化乙丑春　前黄表紙新作

喜三二題于芳草亭

道中膝栗毛四編

十返舎一九著

中古貞柳の狂歌に螺貝の出しむかしハ志ら須賀今吹そよく追風なりけりと詠しハ。東海道に名たゝる今切の渡なんそのむかし明応の地震の比山の尾より螺貝あまたぬけ出てそれより海上あしくなりしと元禄年中公の命によりて海上ニ数万の杭をうちて蛇



鷁をうかせし往来渡船の艫櫓をきそひぬりけし。

御恵のふかきことは風和らかに浪低くなりてゆるよ

難なくらの浜通ふ舟も静かに八ツ段をしおきそうて。

あら井の駅まち渡しの人名物のかばやきをなし

飯をかくし傍にぬるまげふも蒲焼の匂ひにひかれ

候ふるおりて舟場へ急ぐ旅人は足もとうつろに

ふみとよげに鰻はたれてえし里四屋へある宰

領はくちやかましく早役をとらてるさしはさみて

のしるあつく茶屋のたうるぐしよつとむしよれ

いてそし茶屋茶屋おんなのまへで我きをちりひ引

とめてそぶくなかり人足横にまりてくらん

馬士らしきでむきてひるぐりちやがられ夜をあるく。

きうしうが性根はなる名のむしきまつるんぞんく

てエ。かくもせぬヨエドウく　ちや屋おんな　おやまとてもやまうり

まアーしく。コレあ士じんおろししさへせへまふ　ア土　コツト

ぶんなさるりやおはなしがあぶへなされ　トちや屋のおんなさるを引ゆるゝ

浮雲

このしまのきれはもめんのわきまへふめんふびろうどのふくろよ
まをあてゝうらよりきれをあてときうちが待でるよりあけてきさ
りくゐんしがやまんでゐる。向ふの主がきふしをかける
ちがお侍女のかほとおぢりく見をあとゆでちやうんとうり
女「おちやあがりまし ト ちやとくんで
侍「モウ何ンじややろふへ 女「九ツま
でもおざりますよ 呂士「きん中きやうの今付(じぜん)ドや
ろうい 侍「あゝいそそふ。何ぞあるか 女「おなかなのうらぞ
やれがおざりますと 侍「なんじやお内儀(ぎ)のうぞや
きやう 呂士「次てゐ事のきつかん書れなかゝるやうし財ふ
ぶんなふさ身お為(はめ)ねハ是ふあれまけとおふづけが
すこしでみツ 侍「その野ぎうハこゑへとられ 呂士「いえ
モこぶんねやさ身ちしお勝(かつ)がおざりますてへ
てもそ出酒をいつもおふえさおざりますと 侍「ヲウ
お身さけがきれり 呂士「ハイめしよりハまれでおざりまさ
を 侍「多んアゝまのちかゐるしや勝(かつ)手(て)ふのふみれ。身六(ざこ)
えふうきてたみしべふれまとへのをかゆし下か
おやうぜひがなかん 呂士「ハアぶんなきハあがりまどとも
ぞふそい。ごがよまおざりますと 侍「アゝ解(げ)せて。お身酒(さら)

まそくせしいふのじやろぽ。やはりなさるんぞ。座中
出家衆(でちやうわう)の銭湯(ちんちん)じも。おもしつてまいり参る。がよ
酒(さうて)はなかぞくいふるへ次第(せつし)でなさるんるじや「ござる
でもおさりまするとかぞんじてそこことを「待「イヤ其(その)ていの
まへさんが請負(うけとくがれ)まするとまやまし寄(ちやう)りの茶(さく)のさん
忝(かたじけ)じもおきづける「るす「いやしく在売(くく)屋のお蔵ゐほへおも
さとゆてもらうのごんぞ。はやまあるけれおかへしれましても
「待「捌くへて八銭(ちん)もまへそよ トさんぜいにふ八文出して「るす「ハイせめて十

六文にまけりませ「待「そうしべ。手もと不景気(ふけいき)のりで今
何文もとれぞ トぜにを四文かうり出してわたすとひき「待「コリヤまそく。
南無(なむ)三宝(さんぽう)。まやりかすこへらはおつくそそうなまたれ
大切(たいせつ)の草鞋(わらじ)をこてるまで漬けてあまぐがあれてはおつ
こそみじや銭金(ぜんきん)。江戸までもぬかれるこそらあど
おやりのを トぶつぶつこそいふ「手も（ときさ八おりしく）あるまいなどへおとは
でもつごうおまちへ「待「まちまちし「小八「今かりまそれ八
草鞋(わらじ)一足とるとどまでおとすれなさるしかんへま

しさゞげしくちぎとろがおんぎやうでござりますとの
侍「イヤ身どもは髭がないにとらぬによつてさやうなれども
一度くわるしい河も今じまでも切戻りまするおり
〇「まことゑんま王のきれるは、わるき下手でござ
りまするが、わたくしが切まするとて、ぢつと私
も当時は一毛の本をおへでまいることが出来る
までこうして置き申さず、おちやうまでお
いて去年本願寺へまいて見る。しかし又
今ゑんまへ出ましたが、ぬかりはしませぬ。これ
でもござりませぬ。侍「それ／＼おまへ身どもより
ぬが切れるではないか。ごぜんのようにぜひ／＼
まうちのふくもちなされば、〇「イヤ一寸二寸はまだ
ゆるしても切ましませぬが、そのかはりにわたくしも
きれてもおかりませぬ。侍「それは不思議／＼。〇「わたくしは
なんで出来ますがふるいがんこしていまでござる
きれてなくやられましてございます。〇「サア／＼あるといふる

アイおせへ　トくの動はくとしく之出此川ゐくまづれより二人九
やさ川までの荷をとしてすゐのり川ろじまおそや

さる所ゟ出しりもの少まなゐれぞ。
弥次郎兵へ其外の狂哥をとにつさむ

〽きるがゝうむそる湖の山の冬ハさえて

雪ちらし　ましら知くつん遠やせん

此おうりゆて向ゆようくる。やさ川の加るふ川合　きさ川りをろれ

一同やどやおやろさ。久ていうぞるにちぐ〳〵の一旦んがおとそ

やさ川〽ぎうんとゆ〳〵ぞるてれでいしやてぼ所一村つゝ丹柱

ゆゆけてしゆうアまどし　女の里まぐんで取て一旦能さみぐく
ねかうのさとうとき

加るとうへまるとうしろふかくてかさりませ〽ふとく

川まで弁にごがいく　一此内安倍川のうとるの川床ちう男二ちうの飯
ゆのうれバ小分添ふもさ添の呉るふのう

ふうとの八とのぞゑるかとう紀一旦鵜ハ仕合ぞや。コリヤア安布金かるでおぎ

あるなきとうし浦水が　あいてあるゞけ　おまへ六ハ

ゑうきまちつさがお徳よいよかのじや　〽ひんはそうぞ。

いうがもまさしさの　それとるくなりいてるりはんぞさ翁ぢゞかたの
やくしの弟がことさぐりかれバ児叉ぜずもずあく。まさそれ今年そ

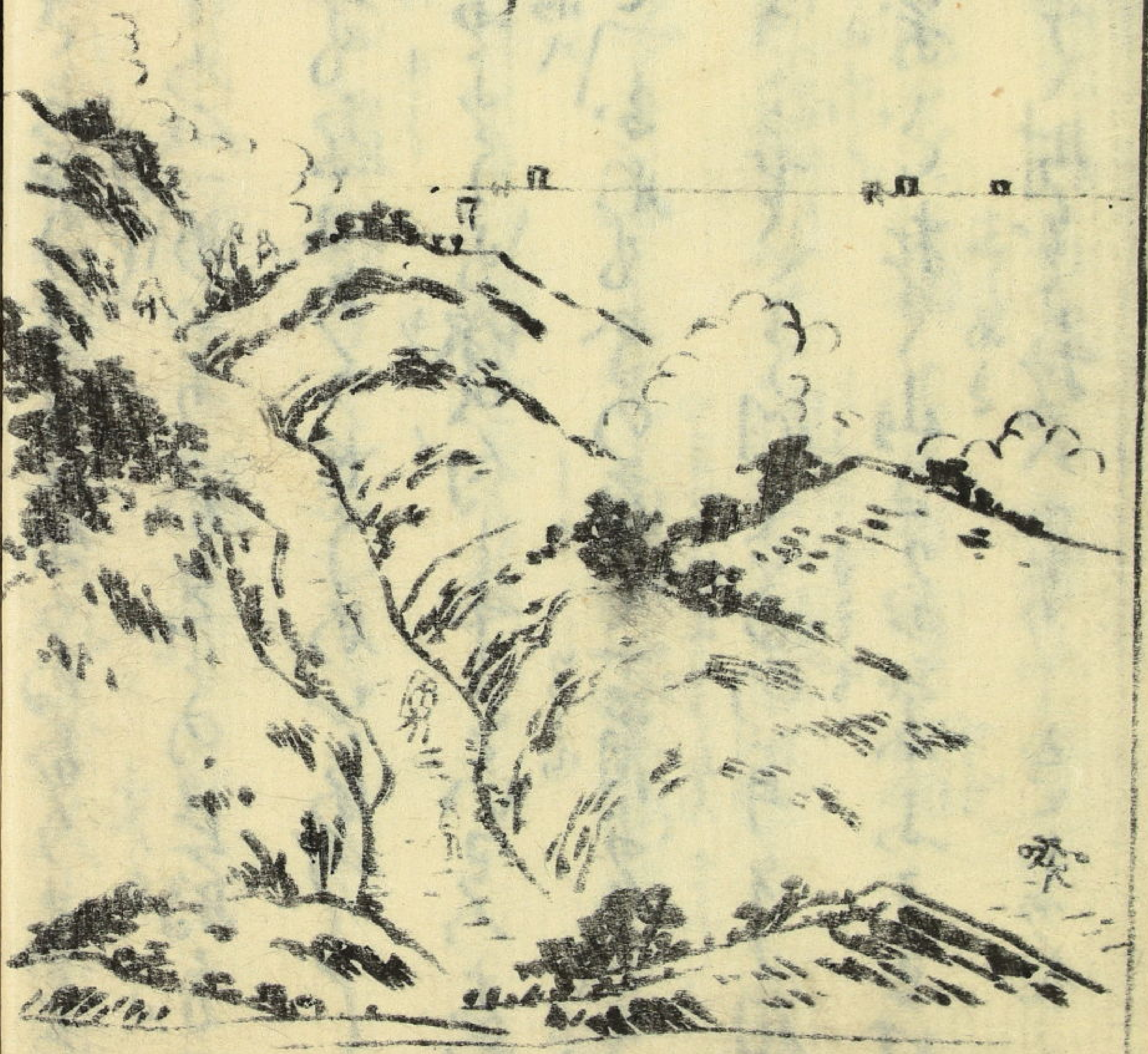
の川てきさ田力が文よおりそく見るれさしあんくさ。安んでもでもいつせゝあ
うるしときさ八そうくの一なとおのがかしもろへちやくかく〳〵そ

それう幽ろみどしているでのそうちやくもきてくさいの敵よいてる。
まうくその茶や女おりそま出よびきるをまそ添れくこく

出女の郭のくるまも名にめでゝ
ちなんにくきを白まての宿
此宿とうちも死径なく汐見坂まさしかるまし
見ち京へ小八山つゞきにして東ハ蒼海漫々と
見えて絶景まことにいふばかりなし
風景多く数ありて去とうしや
一女が国りの汐見坂ナり参る
小八とく見つましるを一八ア見形ハ多くの景人もやる。
女郎の土産かゝつけて

アレ向ふの山とみえき字のおし奈がねおりまきハ
小八ドレく見ハおりしろ玩一めいよふむきの見形方ハ
あんなおかしろふもなふいちくせうめをめづらし
がら土産にてきへゆよりも発句とやらといふものを
見さとおんがあれど一八おれも今の奈で一首よんで
きるちまいかてきらせましかてるの耳つ風
どしろんがとらりふ家ど。たく山ゐおゝふとも見け
なかく奈の絆きて時ぞ秋ハおもしろきなんと

奇妙なくやうにんなハあかりのしやうじもれ
かわりく出る女が。なんまいされ。うさが出すかついく
出るといふものゝ名をみれて「ちよつとこれが
呼ぶてゐるのよ。イヤもう酔てもあんまり嬉てくれ
とうし。酒が呑しうてならぬ。こゝ夜ハ魔所さこが蕃
場でござりますと。サア精進一ぷくしまあていらアまを ト茶の
うどんよせると「こんな一番のまつし。コレ女中そこへ酒
とんでも二升でもうめへ肴をつけて出して



出てくんな〔弥次郎兵衛かなの内を見て〕「ヲヤ小八ではないか。大夫どんぶおゐでか
なてをいふな「小八」十三 ちよつと呑せるがよござる もちいの
くるひなりのど〔トきれぎれにひるひし思ひのやうすに一升どぶして〕〔弥次〕「手めへそれ
とろんなおごろか「小八」きれくてのむ〔弥二〕「おもしろへ おいらも此
猪口をよおろふ〔トおもひでござをそりにころせきれるをまちかしやうがて おとうさけさるとかち出る小八とのもしろなど〕
のさればう「見れハおそろしいおざりませと見ぬいふぐきまきも。
コリヤしぶらくごいかへにしやイゑんる来されのさゝき
の糠丸まづ土産が徳利を下されるへ〔トかごにしんへようとどぞんで〕

のとうけるぷ弥次ハもおうしくおもいれのさうけるが弥二
きさ八へのぷんへときまされてぶんまうるう「サアく出てれしゆ
いふぐの徳利代ハどるの馬場がおそらひぶ〔ハイく〕
酒しさるなで一両八十文でおざりますと〔小八〕「コリヤどう
て無なくてやァ ぶ何と〔トふでくだくのせなと持つて来ておきる金や〕「ヤそんなぞう
ぐてさるまきの一本の銭八ぶぶしと「ヨそれく。〔モシ〕思れ。〔先刻〕
おかさの糸でござろ菜ぶ。ふとんの寄ふ一匁文銭
まぐおいぬでおきましらぶ。あるう兄でくぶしきれやせ
〔トいかり肌て小八〕「十三度ゆかぷや兄へなん此入「十三ないまへ

あゝまれ路用(ろよう)を入れて置ましたア〽弥次 さつきのさいふやア
小八。手めへがふとんの下から出して。ひねくりまハして
ゐた銭(ぜに)じやア 弥次〽五六貫(ごろくくわん)それでおざりますと ト小八のふところに いまゝでいれて
とりつけ置たる包みと思ひ(?)ありしハ目前の事と(?)おもひしに小八ゞ(?)まくらもとに一つおごりてふとんの下へ入れられ 小八〽ヲヽ
こゝで(?)あけてさへ 〽ナサア 持(?)経(?)に元気でゆきやから
それよりおざりまして ト小八ハいひあいなからさし出したる財布をうけとりてよろこびてかへり
ひろいてお有(?)ひし銭(ぜに)ハ 持(?)が 儲(もうけ)
有(あり)がたかつたのさ(?)ずれ そらく(?)

かくおもひてゆくほどに境川(さかいがは)といへる。爰(ここ)ハ
遠江(とほたふみ)三河のさかひにて橋あり。そこにて地口(ぢぐち)てよめる。
遠江(とほたふみ)へはたぎし合せる橋なれバ
木の六乃 虫しいふゑうりにまた(?)
程なく二川の驛(ゑき)ふまへ(?)出て此(こゝ)に毎(?)に 海(?)
定(?)しをあきなふ中小(?)ハ
名(めい)物(ぶつ)ハ いゝねざるきこハめしや
ちうふし重(ぢゆう)皆(?)のかも川乃宿(しゆく)

両側の茶屋が声々に。旅人を見かけて呼たつるこゑ「お
休なさりまァし。あつたかなお吸物もおざりますと
無縁の者で酒でもお飯でもあがりまァし、
ゆかるくも引け。北八法印どの「ヒヤア八九来、人てらせる。
畜生め。またうい(い)て喰気が出るとまぎれ寒山丈めが
きけえでけつかるハ。法印どの「あかうめ。まどりが
爪の親父めが草鞋でおるこつァあらざするへて
ふられめ……それも亭の主と一所あなたなるでおうきた。
いづれの茶屋の亭主かと聞くや、お小体し見くて此方侍の出てくるのが
あすこの法ぞうせいをもちびひきやを多ど一と踊りてうけまりる
弥次郎兵衛どののおきようひ流「りァお中さきぶけ。大屋根も
二本さしているむラアいかな儒者さへ来ていると
大屋ゝおりってけつかるそうな法印「アノ祭ふりけとのみな。
どうぞ蒲団がかさねてあつてァ法印「その名ぞのいて
ゐる人の天窓と見んや叶役めよりんぞ、ソレ
てるがきさア、ヽ「アイタゝゝゝそのハ爪で合羽紐とかきや
がるトけつまづいてこどんとたふれると。
あやうの中なるいま一番の男「コリやろうめ。合羽かどへちる

とふくうけやァがつて。ふてへてしとねらせやァがらよこつ
つらァかぶりなぞ〽ハ大つ江山の飯時きやァたしめし。
新ァぶうくもきがはなして〽るんごとのぶちまる
さとぞ〽きききのきの赤鰯で土きれるかのう〽そよ
ぬうしやァ切かやァなうら奴。コリヤ閑助。お身のとしの
りのとちようし借しやれトやうたものくきけがゝのりのとうまるぐ助〽コリヤく
切なくばお身の名者でなぜきくしねへ〽ハテやかましい。
ぞれできまれそもいくじやァ鞘へかへ〽イヤよくなく〽ハテ

去れいやしとてもちようしかしまれる〽イヤきてぬけも
きのきら奴男ぶ。おれがかんとうの親玉へ鞘持乃
相ちなへ二百のくちまてられそとお身さまもきへつて
みるじやァ鞘へか〽ホン二そふぶ。〽エヽコリヤおのれ。おのれ。
中内なれどゆうしてくれ。ふもやくいけ〽ヲやいくめへ
サァきれく　トけうらうまるくにめんくだおしがで〽エヽ2アよ
ぬうまやア。不覚がなうし奴。寒殺しでなくるかよ。
ひつもてつきまとふ行からとふ〽ヤナレ人ごろしく
ひつ信んで鞘ちさいもかんの男　その下座さゝの

おさなごのおくて　おまへの父さまは「カツチリ〳〵　ゆくやまからでなへいかちからなを

浄瑠璃も三味線もみなきくらべ八　語「ソレ大隅ひのけんまで

きれいもこゝろものがれてほそぼそながれても

はるざしの接待（ねきゑ）ハ作（はけ）しん宮れども

宮（けい）紋（くわ）をふし八なかりし節でさし

それより此筋（ふく）を生てさどりけるまやくも太岩

小笠をかぶり元宮氏の語るとふしおかつて

訳けの弦（ご）任（さく）せるおかれ鏡音も

魔くらひしハ　出来宮乃うち

げうもう竊のきしきんど八さしぬ合うつすぞるる声ふちるさし

あしてゆく内々もさきかる背返愛の冬ひきるがら。

我ぐてとびれとちろしとぞうの風呂敷（ふろしき）包（づつみ）や紙（ぐわ）合（つ）羽（ぱ）

も。なふらく躬天るなかりのどこう洗浄きん志めくの嘉

しぽろちがそあと一乃ゆして。撥を持ちおち志ゐ。

弦へかす語（ごり）おりしあへ。をさむいてふりく行が揺て

ある　ト　ひらりとその文句の名句を　さらりのきにまくもみつけて　語「サリ八。いちめへりうり

りつて元「三しやくふ。ちめへもしめさへ　せ久「えんるく

経けんでやろふ。サア。ドイ、フウ、ミイ。おつと　まつた。小八「ヲツト
いめへまし―ひつこぬいて何ふうる事。法花宗と見えて信「ぶぶぶ
ぶぶぶ。ぶぶぶぶぶぶぶぶぶ。ぶぶぶ。ぶぶぶ。小八「ソリヤ法けきやう。ゴザし
うそ。法花「ヲツト文句をいやそのつぎの情をはずぶ。ぶ。だ
やくそれがいふト又向ふよりくるのり山から谷を見おろせバエ。おまんが紅や布さらす
ひげうのもどの谷「コレヤこゝへ「これの
ぞうぐ。法花「まことにぞくし。お隣の若ハ勘形郎としるの　うへ
まなあたよしう小八「めんまつきやいる。ト　このけんていつう
ざりくのらうくうる

「情らんのこゝろみるハぬいいざうるからう
まや小八「イヤアといふ情をじまとまへ法花「まへくう
あうと情をのようぶんがけしろとみるやうかんのくづよ
そもがある小八「おきやかれ　しく　け門おとようびくぶざえ
うれてひるつけし
るが、ておるうに「牙とやいも紺がおもひを置かしきぬよ
まつせるや。名のやわやゆめかじさ名ふ本やや
サアサ。さんかうし小八「あさやるあらがまるドヲ
比丘尼ぞし。サア法花「法花さまをもきといめへまし　ん

御休所
二八そば

〽小八「今は暑をとめるへ中へいりのご。是でお供を連
ときありちご。ヤアノとれつゝアまんざらでも様へ。
さん様へ。せらちらの比丘尼がおれを見てアノいろそ
ゆとくと歌がとどれるよふで。一番鼓め〽あの
きやうのいのおやア様へアリヤア鼓のわく
のゝハころくいふぜト
すこしのびくふそもよえつれ中も〽もこわる火ハおざる
見なれびくるがきさ八のそなくよるて
十七ぬら〽小八アリく今うりてあげやせうト出して

〽小八サアおまへさんまでお出がとアありへいままなさる 名
どやのなうくまりのまゝ 小八えやあゝ一所に流しのなんく
赤坂とりあせへ。一所にあそせう〽それハおかりがやふ
おざりますと。手をどうぞおゑあいを一ぷくください
ませ。こんとのとおまし〽さりくこだとらねと
出しな。こんなおあげよふ〽それでハおやこおちやがでお
ざりまする〽小八こちらちやアよしざ。財りもめへがとのよふ
ろうかくしい顔で。なぜ髪を判るさう。かんなそうの

しておくれ。おしいものぢや　比丘「ナニこと〳〵しらが。そこ人俗（ぞく）が熱（あつ）し

そして紙も持人（うすひで）へおかざりませぬ　小八「あるぶんかごろ

ちつとア一だんまらまう気ど。なんしりぬりしてくん

なさらんか　比丘（びくは）「ホしい　小八「もやく一両（りやう）まゐりまするて。ぺ代をさ

ん。ぱさ殿の宿（しゆく）へまゐるなふ。ぢやア旅人へ行（ゆき）なかやねら

せ。おやゆく場主（どうず）のちるがござりません。ト

まぢ二けんちや屋よびちるに出ちよう。ひくふかつ紙をへくる　小八「コレしおめへさぢやアござえゆく。　ト　かねてきなから往ほど小八女ちち後をうち

そろちあぢやアあるめへ　比丘（びくは）「ハイ宿へおまちれやまま。

見しぎらぶの亭主（ざいとう）へまいれてよみつまさうし　ト

やまもとさおくしれてる小八あわてて　小八「八手めへ今大兵（だいぶ）さまるく頭へおかしく書きし

法けがこいの笹　小八「ちてさんでやふおいでぞそこの

トうつくしあるしおろく　小八「ニイタ〳〵閏とおいてまつまし　をうちおおる生来の人

ぶれど。トウ名みえん懸ヲツト嵩物（もつ）かさしさし　小八「コリヤ

さし坊主　旅人トふせうぶる蓋とひろきげゆくまする　やがて吉田のしゆくまゐる

旅（たび）人をおゆく　今宿（きき）の問屋（とんや）へたち

家（いへ）もよし　国の出（で）の上へ緒さち

はじめくもがれよく。おきまり者しゝめ所かえよしきらるゝまやべる
手合土方の人を見おかす。ありましてわとさい。べ中みごもひきう。そしても
小宿の小万鼠がらかつてる事ゆをおそる。おちせといゝその。むかしき
づよしいとうてをせおひしおとし。むかしのそうとかうそうて
ヨイ 源氏屋町 義経ヤアイく。ちやく来きれのく
トよぶ文ま所詮が小八おかしく。このよしつねとよばゝる男をさがし。紺の紋
つきのいたそでおかばさし一〆もつてそいゝしよそをせなおひかしれたおなどきやう
おしきとびん一つめ井せなアや。悪所かよせなアや中よし。足が
さげさおとゝ達者ぶアの。さうアおとよおつきれさつへ石こお
がはなゝ本阿でおるうりしさぬ。中井まづゝはせんハアそふ
しむつこうのしやしきそしきてなきる。おとよの舞場で

静はおが褄縞の痘気さアおころくとし。金玉ノウ
はつうあげてこつちぬなれと。おげへげくまさハぎなる
まよをりよハア六代吉おが。杜氏様さアニ本だとしも
うちくりとげで金傷のウしてむつくんだぞ。せつる
がえるまんざそれよ弁慶ハ実子のくしさアで咽笛
のウつりをし風アニうしてなきまつさげで。ゑうがうお
の女盛よのがこ人のウ介抱してや何しおとゝ
つるんでまやまへ。ぶしちやアおふもまつまてゝ。

丸　西風　東風　連　壬　何

うれしうて仕合ざァのし。何ぞこのやうにしてといふてもあしもとやまを歩るまするでへおめへ

ござァ何所へいかなさるへ。おゝ伊勢(いせ)さまへまいりやアすもんえ。

へきゝまきげア。おめへさァ義經(よしつね)さの弁慶(べんけい)ざのし

いかさまグでぶらいよこれも義經(よしつね)へハアそれさまの安宅(あたか)の

くろうおうしんぞい。コリヤハアコレし元が悪さァ(くまは)法へ出てくる

まへず。綺麗(きれい)がありやて千本桜(せんぼんざくら)より芝居(しばい)のウし

やくらぷそれでハアよしつねぐァの義經ぐァのし。狂(けう)

言(げん)さァおつむじめと時(ひまで)忘れるよめかし。その名を

やうぞしいつけさくせさァ。今でもおどける(戯)いつそのを

おざるへきこえやしさ。そんならおめへの義理よなつさ

おまとこえそれ(よしは)そでおかざる。そこまへまでコレしざもが悪さへ

江戸人よそやが来て天神(てんじん)さまの植え(りうげん)のウしやさが。

きくおさろ。くなげさアまくるよあふぐハア時平(しへい)とやう

みそ来ゃらいよ悪(あく)人へどのが讒言(ざんげん)のウせらまさげで。

天神さまの島(しま)ながしよなつまやすまと時。恵(こ)まの河

てお出やるし。おふがハア見物(けんぶつ)のウしておる。ぞあさな

さちもうさまさちもやかましいとしがんこんざと混ァ
さがして。御門跡さまの座をしやましよふ子家
ぢァの説ぢァのし。宗意さァへまがちらいで悲し
がやするそこでハァ死ん物の中から惣兵の与五さんし
いふ悟らん人しが宗旨さァべらけぶんでいやふやァ。
この志ざやァなんしなんぞく。あぜ天狗さまァ僧
ながしみせるのぢ。宗言お出るさ。おちらさまの
愚んまさまァ見るよふなる。おそれじよのが悪人ぢァ

あふらも天狗さまは科ァなんいがふまおやぢァよつ
て。ふしをとる気ふしのこえぢァ。天狗さまの志ァ悪ゃァ
此惣兵の与五左がめりつへ。此年どのやらしうがおいてぶと
あふハア。此年米の二俵しも。さ志高ァげる力の
あるせなァぶんで。雑もうひとつなげて。様掛のゥせる
人さァなし。死ぬおもくちるくぢ。与五どんよのをふさ。
その時手しゅうァちよびき出して。ぶげしけし。むま
ハァ村中のい名れやこちがァ。家衆さァへ斬こんでらん

ござりまするしおかひなさろ。そうでせうし。恩じ役者の
財布じよのハ。コリヤさしまうなれて。尻のうちおいだをおよらし
て。はんぬげやしそれやうハア名ののしりどしへお合つけ
て。うよ此村へ恩じ役者アいれさうなもの。場合のうち
て。其うじもぐるを悪のまうでやさアで。様子のうおつや。
しやうさぶ恩じまでやようウア。ぶちうこれからどうも
手うやさ。トきもいそうでのうみだいどうら。きさんらしくも
そゆくままいやうのまゝ気太まきまきまらうる。
こゝもとろへあまき者のゆれゆるれバ々のくくハあつれへ此ちや

しやうるき　はつ寺の　まくの　名号を
こふれも　佛よ　ありがたし　ありがたげ
躯て此おうりよりうりやや日も假屋ぞちう小道んれバ。
いざや急んとて。其外しりとてやめてうとりり
ろをとぐうへぐゆがふ浜びさん椿うわ名稀への一文死よ
くうびれしのなゆんし夕アの酒ハ中ぐうねる宿でありへ
とぶ今夜ハこう大屋せう。赤坂までつらんちがきミう
り川て。り宿をそうやせう。おめへくさびれさゆう路

御油甲山

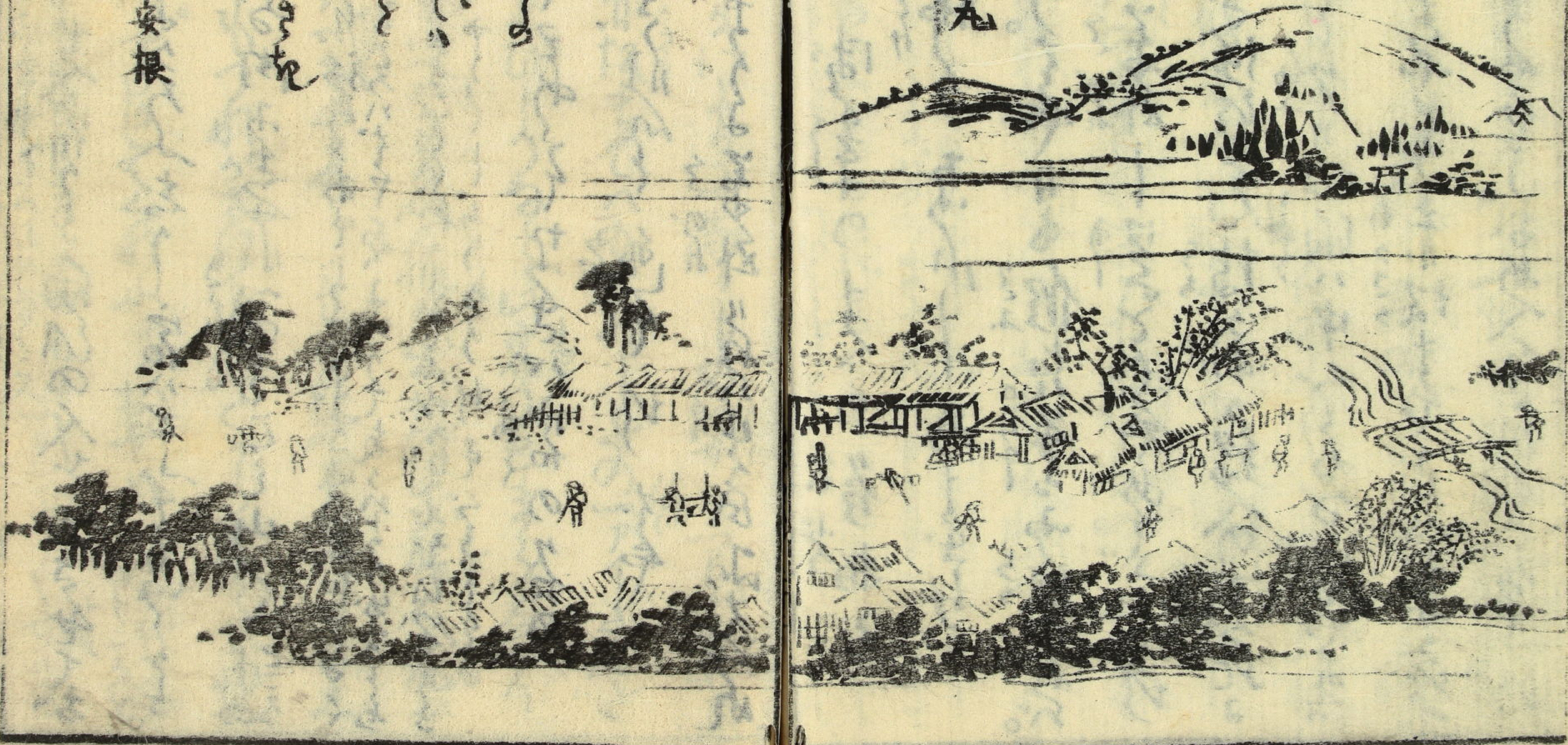
夏霞にうつるかたちハきところて抜く〳〵ゆる甲山の風

水府 空波吉丸

赤坂袖の浦

佐保姫の袖のおくまよりのぞきてハ菱の桜花をたまさかもとも

東金沐 本屋安根



かゝるおりから小来なふせへ宿かし向ひの人を出させてお
きやせう(旅人)「それよりうしろよあるき宿ハ谷ふでもゝつてくる。
ぶの(女)あはそふ町のまへ手前へのてこし山(きさい)ト
よくうけぬけてさきへ行。旅人がおもしろさふにゆるやかにあるく
旅人の後くからころハ茶や夏よりそ来るかのゝ出かけしと
女いづれもめんどふがりさるゆゑ。やうやくそこでとひいそうる
されども旅人ハ宿へやう〳〵あまりきぐるしく
その頃(ごろ)でもあるべしなきさバ宿の名の
申(もう)しけるさかいにかさねし(みせ)
旅人ハ来あまりは茶屋(ちゃや)を斜(ななめ)ばかりの所にもたれ(きびれ)

の茶店(てん)で便(たより)をうけたまはる。あるじの婆(ばゞ)「アイ茶(ちゃ)ア
まいりませ(旅人)「モシ赤坂(あかさか)までへはおいくらの「アイさんざ
十六丁おざりますがおまへひとりでは宿(やど)までまゐりましり
ませぬ。此さきの松原へハ古狐(きつね)が出おりて旅人が
よく化(ばか)されます(旅人)「それハ怖(こは)や。狐の話(はなし)をしてなぐさみし志
かし夜(よ)へ向(むか)ってもつれがさきへいつて[illegible]志ろとき[illegible]
まきをはこぶア祢へ来てしかふアイおゝせれハト茶代を置ところを
さし出しけるにかのきつね此ハしこのさきをまかるく。ずの毛は
つのをほりかゝけきぐちで向ひまできぐのあくこへ「ケンリヤ

なんきやアがるハ。おのれ出て見ろ。ぶち殺してしまふト
手さきをかへてとびかゝれバ。小八も心得たりと[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]小八「アイ〳〵 徳さんが
徳「コリヤ手めへなぜてふみやる小八「申そうてまさ夜へいつても
おりやさ。爰へハ己が頼が出るくらゐでござらア。一両
ふいにしておりやて待合せさトいひながら[illegible]
[illegible]徳「[illegible]そとらへそんなでいくのじやア。祝へハ小八「[illegible]
おめへなんとゆふそうして[illegible]がろうさろふ。膝を[illegible]てき
[illegible]
さうくひるせへ徳「だらアねらせる[illegible]がくるりれる
りのうへ小八「コレ おれがいる徳「おれがもまきまじい。[illegible]
小まそのまゝぶ。よく化やアがるさちくしやうめ小八「アイ〳〵
徳さん。コリヤ[illegible]徳「[illegible]まるりんがぶちところを
のぶトうろ[illegible]小八「おらく徳「いうさア
[illegible]
性体をあらハせ小八「アヽ年[illegible]へ手を[illegible]てでまする徳「どうふ
まそるりんが尻尾を出せ。ござまとハとうきそる[illegible]
[illegible]
手[illegible]てきるぎさ八徳「サア〳〵[illegible]ておかくゝ
[illegible]

ト北八どくりはしやうとそこへおいてそこく あちら坂のきもくらいさうなゝや
いづれのそこぞや 北八かきやくをあめて かどよきりの光もえへず 弥次ハねぶ
くろむかひの人ハかりてや 北八「イ
出る婦るりのくるる円「コウ 弥次さんいつかげんに解(しらい)てらんね。
ぜゞがんの目りん人がきまらく見て目りいぬる 弥次「ヲイそこと
くらへハテ宿(やど)ハどこぢやらん 北八「十二 おれハとうふみるかのと。
ふれがさびへ中ぞをとこりて おくれあふしまぬ 弥次「ぬかしやア
がるうちくせうめ 間向よりうる だ金のおとこ「あるうち八旅宿(はたご)お
とまりでハおさりませぬか 弥次「きさまむかひの人か 留女(ざや)「ハイ
おさまでおさります 弥次「それ見なさる比だけぞこゐいや

ト北八をつらまへて ひつくゝるハせる 北八「アイタゝゝ ぞうさやアがる 男「ある
くゞろか。お前のおつれさまハまだおわかくでおさりますから
弥次「十まりより つちいうさ 北八「ハア それでお遠(まちがひ)まして。私
あのおとまりハ 給人さまじやし 私のまわしら ト留女ハこうく
ひろきする文のあるそこ どやのうせなえ子て 留女「まだとまり トわけよりて そこまくる 弥次「イヤ 俺(おれ)
のりのがさん人へ来てまごかざ 北八「そのつれへおいでぶれる
弥次「早くいけあぶれ狐ぶり いゝかげんに尻尾(きつが)を出し
おれ。イヤまて〳〵。あそこに太(いれ)がゐるコヽヽ シロコヽヽ ミ

ミゑきく。ソリア太がきても、いけぞやうくしてゝ指なる
うしさて八梅での孫べ。かんざうの小八が（小八）ぶれさる。
目りん生ぷれぶい（孫三）ハイしサア、おめへの所て色やせう
トむりけて、きく八がいなりしり どもそくし、かぶやのそいしも（小八）サア、おきつゐなさうなせんと
お湯をもつてこれ。おさしきへ参れる（小八）さんぐ
めゐあけと トおしてあら大坂ちかぶの女ほまつとざし きへ大ぶとうもざしきくうちふりてハホン二（孫三）
小八不留しやア。おうア実はかんざうのきうゐぐ
とおりひつめさ（小八）ぜかくしいゐはあつくい。すぐさは
手そがぴりゝもうり（孫二）ハイしおうしまでよ砂ハりふ
りの。やつなりこれがぞうされてゐるのかじやア孫へう。
ぞふ申しおゝしるむすちぶい。トむしやうは出ていきく 手をさしき
（よね）ハイおよびなさりましたら（孫三）コレぞふも合点がいかぬ。
こゝへぞこぶ（よね）ハイ あらさらぶぬく 赤坂宿でおざりますと（小八）ぶしぎ孫
ひきんぞふしらのぶの（孫三）すぐになぶらうしてゐやア
がる トいつゝまゆげとぬらして 出てれしもさん。なんとこての同へ。
卵塔場ゑぞやア孫へう（よね）なるやよう おつ盃な（小八）

おりよく〳〵 ト此内より中ぐらゐの女「おゆはおめしなさりませ
洲八「湯ばさん生湯までも入て。それとおちつけるが
祗江「いよ〳〵ちくしやうめが。蓋へつぎいれよかしとやつて。
そのてとふさいの祗江「十二湯は清みでおざりますを
うろ。きれいお番でおざりますト。ニアおいでなさりやませ
トいのてにはちやへモミ「お淋しうアア。女房さんがこでも
およしなさりませ祗江「だうでいふ事。仏義を抱
て孫ぐとでもいふ二事いふてとおへしやのやうき

洲八「そんならさつそくまゐりやせう トきさ八ゆどのより出てくる
座敷へ「さいはひお客さまへやとまりまして。今晩は私
こがたが。もとし祝ひごとがおざりまして出湯を
ひとつあげませう トいひながらさいはひまゐる祗江「おそれいる
さるる。なんでおめでたうございますの洲八「ハイおさゆうで
おざりまする。ニの甥めが嫁と世帯ましたと。
今晩婚礼をいたさせますから。おやかましう
おざりませう ト いひてくるまたり洲八ふろよりあがり洲八「なんの。おとう

うけるの〽てゝの肉ふ。きゝん此いがあるといふをとこ。
コリヤいよ〱。きみつめがまぐろきまよきこゑろさ。
かふゑ風呂へもきいるめへ見え〽ておめへも又
ろげんはしみ。さりとハ機会ぶけへとろさ〽イヤ〱
めつたなゆだんハならぬこの娘ぶさもこんなおこうま
そうな兄へても。性ハてるのみ〱や大の屋ぐろうよ
〽ホゝ二そふぶろふう。おめへハ又そてぬ合せへとちつれ
ありがてへ。お志るしまやまじやせう ト まきゝ八 手ぶく

みてさんつくものそうけろ、話ぬ此のいわゐ〽いめへまうしい。ゐえと
きみるくさまぢうよみそかのしまをすゞして
コロくさしやァがる〽きつりへハ様へいつさいのこるおせ人
〽イウくてるの小伎どろ。ドレかもしをかどしてみせやむら
ムゥ。とちゃァかんきうのよふむじごみもてへらめぬ。し
まうよ中う色。ト ぞさいつぺそでのこちからもしらず 酒ざく。ドレくさりう
ヨウト此まよハぞふもいろわからぬぶ六ハ様へ忍びよ
きつりふカリく。この人ハかんきうの忍びぶらく 〽外外
さりのおくつさろくしのこうけう此内名てある人ハ見え〽へのおもてぶらひ
とされがしく。そうしてきいちう。なされざまはへかぞやこん此のさうづれ

ごくちじまりとしてきてうひの文字へ四海なみしづかにて。国もおさまる時
津風。枝をならさぬみよなれや。あひにあひおひの
松こそめでたかりけれ　小八　ヤンヤア　張　ヨウ　やりやういゝ人
小八　やらほしいなら、くらあめへさんきうし　言をたきなき。
禿ちろところさち入まりしなホンニ　むまのくでぶのせうべん
ごのとらやうしおりやア。やとくもひゐりて　唸うち
さりし。張二　おりやア二世の化されさ云しよなりて　いとゞ。
今おかやアをふでも猿どんご苦労とさせやア
がらこへ　小八　きおやへのぐらうしよおりやア。おくりアきそう
出てそんちがるめえ。あれさりし　ト皆々てよろ張出　それこれまる内おくの
ざしきにて　スるひ上へ　小八　千代もかはらじいくちよも。さうへざうふる松
むねのかさぎの竹のよ　さこめて　老しなるまでと結
ぞとのしうろぐめでたし。三番の嫁といふもさま
やと。高んとし　ト　さうちうせざいわけまる皆々て今女来る　「おるしなくる。
かよおゝ床と言うまるきまよろへ　張　さんなるとこまきやせく　小八　オコし
女中。猿の太鼓へかよまを中しとうきこめて嫁ぶ

女「しかしなんぞアイサむこふもよつぽど男よわぎでおざんすへ。
ぱきアゆふよふでおざりますが、ときのそふることゞへ。
おちゝの茶(じき)子。弥次や喜多へまきもし。むつごとら
きゝ居る 弥次「きやうとぞんざいなる手合(てあひ)し割床(わりどこ)へおゐや
まるに 北八「とのかの大切(たいせつ)に 女「よう おまへがまあなさんすせ
ト出てゆくゆゑもなく。弥次郎はしやにむにまよひ、へやのうちのざし
きをむなしくよわり弥次のあとをひきよせしきると さけれ。
きくみしいかにもかくしやうすにしてみちのりおくしてまことに気をと見え
見へきをふたりもみをはかりしたしらちやほくよろきてゆさるよふさきに之
弥次「さあ 北八「何だ 弥次「ちつとこれはあやまりやうる 北八「ホンニあれがへ
弥次郎中でを

弥次「扁(へん)とのかのこゝろもまつまとよかんざうあるこへ
しくもの事まで(ちくしやう)畜生め 北八「サア大きなおしごへが見さ
ぐるむかし 北八「トぶんくまくらのうちでてくるのかおをときて
ふきてまのをかきたうさしのぞく 弥次郎は小ぬすまるを見つとおきもち。
北八もまたのまそひおきて 北八「コウ弥次さん(よめ)嫁へかけた
いかお。いくらかちかしてみせてくんなの 弥次「コリヤ まだらふ
しや(りえん)折公の(ふんど)褌 北八「ドレしてみせ弥次へ 弥次「アカ ひつぞるる
北八「弥次でもちかりと(のき)退るせへ 弥次郎がむちうちまたでござる
のかとしらぬかる。おべこるまぎりかふきまがおちりのまへくとそれのからに
もできみふきをまの上へころげる。ひとともよれもおしまこれできさとつか

〽おのれ〳〵。コリヤ。ごゑんぎなせんぜ奉公
こらへ　トおのれがおんどもひつくゝして
まてしてかのむこ殿　御めんなせへ。手がうごくんで
つまさん　せんかく
ツイ元まどひをまねき。ぜんたい夜の女中が見らう。
あさぎ　ぎ
武兵衛の手代中なの塊をかくしておけ
まづいておきの心づゝア小役がかるよふで。ちへを
めいてまやせう。とうともなしてうんさせへ　むて
まやおきれさいおんをちしや武兵衛もふかん　いや
も　あそ　縫
よ　ざ
とうけまめて。コリヤおさん〳〵ぶれぞとやうらに
してくれぬか　トよびこみてよふて下女か来るをおりして
まつをとうろうづけるまきこ八もまわりち
るくぶもぶれしうらくと手めてひきさてのかるさしくいけて
りの夜どこへくへ　おどろし縫かける話たらおとしく力紙をして
縫て　きつけべやさしかしや着て紙と
そもまもぶれし　あどのつけがの
きさ八も夜ぶらちりみてながら
よ　ぎ
聟　嫁の　縫やとむせうまりをきがし
むこ　よめ
こらへて　面目うしなひして
めんぼく

録うち畢て。夜もふけゆくまゝに。双方寝入
まり。只いびきの聲のみきこえぬ

道中膝栗毛四編上終

無